はしがき

U 介はいま，言語学系の学会で自社の新刊を宣伝するために仙台に来ている．彼は中学生の頃から SF が好きで，漠然と本を作る仕事に関わりたいと思っていた．だから当たり前のように文学部に入学し，日本文学科に進んだ．一度勇んでパラレルワールドものの恋愛小説を30枚ほど書いてみたりしたものの，友人の鈍い反応に文才のなさを痛感した．しかしたまたま選択科目で受講した言語学の授業で，ことばの仕組みの不思議にはまった．憧れの北川さんの苗字が山川ならもっと素敵なのに，という勝手な思い込みは，実は連濁のせいだとわかって切ない疼きがさらに膨らんだものだ．就職活動では，ある縁で都内の言語学関係の出版社に滑り込んだ．給料は決して高くない．しかしやりがいはある．だから仕事で言語学系の学会に出入りし，その面白さと奥深さをもっと一般の人に分かりやすく解説してくれそうな大学教員にアプローチして執筆を口説いてきたのだ．

しかし研究者の現実は世間の印象とはだいぶ違った．そもそも論文を書かない大学教員もいるし，何より書いても締め切りを守らない．言語学の教科書を編集している O 先生もその一人だ．出展ブースに U 介の顔を見止めると，そそくさとすり寄ってきて第 4 章の著者が原稿を出してくれないと愚痴り始めた．

「もう 5 か月になるんだけどね：：．ここだけの話，ほんと W 君には参ってんだよ．」

「そおなんですか．しっかりしてらっしゃる方だという印象ですけどね．」

「ま .. 普段はねえ．今は家庭の問題で仕方ないんだけど．」

『ほんとは先生の査読が進んでないんでしょ』という心の声は封印して U 介は続けた．

「次はぜひ単著でお願いしますよ．特に社会言語学はいま手薄なんですよ．」

やや皮肉を込めてそう言ったものの，O 先生の目を直視する勇気を持てずに趣味の悪いペイズリーのネクタイに目を落とした．O が口を開く間も

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

なく，ブースを挟んで「役割語」の新刊をめくっていた女性が振り向いて声をかけた．

「あ↑れ，O さんじゃないですか：？珍しいですね．」

「↓あぁ T さん．ご無沙汰してます．先生もこんな学会にも来るんですね．あ ..『こんな』って悪いけど．」

「ほん(.)と失礼ですね．h@h@h@.」

すっかり近況報告に興じる二人を尻目に『うちのブースの前で立ち話されてもなあ』と慨嘆しながら，U 介は 3 歩半後ろに控える新卒の女性社員 I 子を半ば意識して「今日は忙しくなりそうだな」と独りごちた．その言葉を聞きとめた彼女は，いたずらを企むトイプードルのような目で問いかけてきた．

「今日の学会も先週のみたいに荒れるんでしょうか？」

U 介は「荒れる」という物言いに微笑みを押し殺しながら，前を向いたままなだめるように小声で返した．

「M 先生みたいな人は来ないから大丈夫だよ．」

M 先生とは，この界隈で名を馳せた，退官間近のクレーマー教授である．いつも一言，二言余分で同僚や研究仲間に疎まれ，出版社にも物申さないと気がすまないタイプの人物だ．先週の被害者は隣に出展した出版社の新入社員だった．その瞬間，T 先生と世間話に興じていた O 先生が目を輝かせて割り込んできた．

「さっき M 先生いましたよ．」

「あそうなんですか？」

「あ，私も会いました．」

T 先生も興味津々である．

「お元気ですよ↓ね：：」

その口調に濁りのある憂慮を感じ取ったのは U 介だけではなかっただろう．今や M 先生の話題に取りつかれた O と T に薄くうなずきながら，U 介はブース左手で音声学の本を手に取った若手研究者らしき人物に注意を移し始めた．しかし I 子は U 介の身体を隠れ蓑にして M 先生の噂話を一言も聞き逃すまいと聞き耳を立てていることが，左下に向けた顔の角度から見て取れる．

『やっぱり変な人多い・・・』I 子は，地元に残した両親のことを思い，あと何年耐えられるだろうかと心に石灰のよどみのような重みを感じるの

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

だった．
（〔どこかに〕続く）

どこにでもありそうな会話の成り立ちは意外と複雑です．人が集まる場所には参与枠組みが生まれ，変化し，移行します．本書はそのような機微を詳細に読み解こうとする意図から生まれました．私たちの振舞いのかなりの部分がそれを抜きにして語れないことを確認する機会として，そしてそれを分析の俎上に乗せる手段として本書が参照されることを祈念します．ちなみに上掲のフィクションは，本書中の「F 陣形」，「承認／未承認参与者」，「傍参与者」，「クロスプレイ」，「漏聞者／盗聴者」，「産出フォーマット」といった概念を用いて論じることができます．どれがどれかって？“The answer is hidin’ in the frame!”（Robert Zimmerman に寄せて）．

2016年10月
編者

＊この場をお借りして本企画を承認，推進してくださったくろしお出版の池上達昭氏に心よりお礼申し上げます．なお，参与枠組みの一例を示した上記の登場人物は，本書の編纂に際してお世話になった執筆者，出版社，関連学会の皆様とは一切無関係であることを申し添えます．

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

第1章　参与・関与の不均衡を考える

片岡邦好・池田佳子・秦かおり　1

1.「参与・関与の枠組み」の変遷と周辺領域 1
2. 本書の構成 14

第1部　教育の場面における参与・関与

第2章　「わからない」理解状態の表示を契機とする関与枠組みの変更

増田将伸・城　綾実　27

1. はじめに 27
2. 分析対象：グループワーク活動と参与・関与の構造 28
3. 先行研究：理解状態を表示することの相互行為的はたらき 31
4. 分析：関与枠組みの変更とグループワークの進展 33
5. まとめ 40
6. 補論：残された課題と教育面の意義 42

第3章　大学英語授業でのスピーキング活動における「非話し手」の振る舞いと参加の組織化

横森大輔　47

1. はじめに 47
2. 非話し手の振る舞いと参与役割 48
3. 分析対象データとその制度的・環境的特徴 49
4. 非話し手による参与のあり方：具体例 53
5. 考察：制度・環境による参与のあり方への制約・影響 60
6. おわりに 63

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4章　Webビデオ会議
—関与性を指標する相互行為リソースの一考察—
池田佳子　69
1. はじめに 69
2. Web 2.0がもたらした「バーチャルなグループ会話」という社会現象 70
3. コミュニケーションとしてのウェブ会議会話の先行研究....72
4. 本研究の考察....73
5. おわりに 85

第2部　親睦・団らんの場面における参与・関与

第5章　空間をまたいだ家族のコミュニケーション
—スカイプ・ビデオ会話を事例に—
砂川千穂　91
1. はじめに....91
2. 分析の枠組：テクノソーシャルな遠隔地間会話....91
3. 分析の枠組：テクノソーシャルな状況下における会話の重心....93
4. データ収集と分析方法 94
5. 事例分析：家族写真鑑賞のアクティビティ 95
6. 事例分析：視野的不均衡の解消 102
7. 考察：空間をまたいだ家族実践 105
8. おわりに....106

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第6章　日本語会話における聞き手のフッティングと積極的な関与
難波彩子　109
1. はじめに……109
2. 研究の背景：フレーム・フッティング・関与……110
3. データ収集……112
4. 均衡・不均衡な参与形態の分析……112
5. おわりに……126

第7章　対立と調和の図式
―録画インタビュー場面における多人数インタラクションの多層性―
秦　かおり　131
1. はじめに……131
2. インタビューの参与枠組みと不均衡性……132
3. データの特徴と参与者間の立ち位置調整への志向……133
4. 分析：不均衡は如何に矮小化され解消されるのか……135
5. 考察：録画インタビュー場面における参与枠組みの多層性……146
6. 結語……150

第8章　発話と活動の割り込みにおける参与
―話し手の振る舞い「について」の描写が割り込む事例から―
安井永子　155
1. はじめに：話し手の振る舞い「について」の描写の割り込み……155
2. 分析方法……158
3. 受け手による割り込み……159
4. 傍参与者による割り込み……165
5. おわりに：連鎖の構築に貢献しない行為の割り込みの達成……171

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第３部　実業・制作の場面における参与・関与

第９章　傍参与的協同
—歯科診療を支える歯科衛生士のプラクティス記述—

坂井田瑠衣　179

1. 多人数インタラクションにおける「傍参与的協同」.....179
2. ３つの局面からなる歯科診療.....182
3. 事例１：問診と視診の切り替えにおける環境の整備.....183
4. 事例２：問診から治療への移行における診療活動への参入.....187
5. 傍参与的協同における複数の志向性への対応.....190
6. “３人目”としての傍参与.....191
7. おわりに.....193

第10章　展示制作活動における参与・関与の変化から見た参与者の志向の多層性

高梨克也　199

1. はじめに.....199
2. 基本活動：視覚的関与における「今・ここ」の志向.....199
3. 会話の分裂に現れた潜在的志向の分岐.....205
4. 基本活動が埋め込まれた継続的な組織活動への志向.....212
5. まとめ：参与者の志向の多重性.....217

第11章　通訳者の参与地位をめぐる手続き
—手話通訳者の事例から—

菊地浩平　221

1. はじめに.....221
2. 通訳者の参与地位をとりまく論点.....222
3. 分析：相互行為連鎖の中での通訳発話産出.....225
4. 考察とまとめ：通訳者の参与地位をめぐる手続きと参与の均衡・不均衡.....239

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第12章　理容室でのコミュニケーション
—理容行為を〈象る〉会話への参与—

名塩征史　243

1. はじめに……243
2. 理容室：理容行為を支える環境……244
3. 理容行為と会話……246
4. 理容行為を〈象る〉会話……252
5. むすび……260

第13章　ラジオ番組収録における多層的な参与フレームの交わりについて
—制度的制約に伴う現象を中心に—

片岡邦好・白井宏美　263

1. はじめに……263
2. 先行研究における参与／関与のフレーミング……264
3. 分析方法およびデータの特徴……265
4. 分析と考察：番組収録という制度……269
5. 結語……280

索　引……285
執筆者紹介……290

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 1 章

参与・関与の不均衡を考える

片岡邦好・池田佳子・秦かおり

1.「参与・関与の枠組み」の変遷と周辺領域

日常の相互行為に参加するとき，意識しようとしまいと私たちはある種の「枠」(フレーム)を形成する．「参与枠組み」(Participation framework)という概念はアーヴィング・ゴフマン(Goffman, 1974, 1981)により提案，精緻化され，社会的相互行為における話し手と聞き手のステータスを分析する際の鋳型として様々な分野に応用され，発展してきた．例えばその基本理念は，「参与者構造」(Participant structure: Philips, 1972, 1981) や「オーディエンス・デザイン」(Audience design: Bell, 1984)という類似のモデルとして再定義され，言語人類学や社会言語学でも広く援用されている．また，「話し手／聞き手」役割の文化的な多様性についても，多くの理論的考察とフィールドワークからの指摘がなされてきた(Levinson, 1988; Rumsey, 1989; Urban, 1989)．

その一方で，1980年代には Clark ら(Clark & Carlson, 1982; Clark, 1996)が発話行為に言及しつつ認知科学への応用を提案し，学際的な研究が広がった．それと同時に，C. Goodwin ら(2000, 2003, 2007)による一連のマルチモーダル分析により，非言語／環境要因が参与枠組みの転換に及ぼす影響や，Bakhtin(1981)の「声」の概念と「引用」操作が創発する相互行為の複雑な実態が明らかになってきた(M.H. Goodwin, 1990; C. Goodwin, 2007)．また Workplace Studies(Engeström & Middleton, 1996; Heath & Luff, 2000)の出現後，さまざまなジャンル，メディア，制度的環境の分析が進展する中で，(「参与枠組み」という視点を前面に出さずとも)Goffman が描いた枠組みでは十分に語りつくせない現象や，想定されていない参与の形式に光が当てられつつ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 2 章

「わからない」理解状態の表示を契機とする関与枠組みの変更

増田将伸・城　綾実

1. はじめに

本章では，大学の英語の授業内に行われたグループワークによる英文読解場面を分析する．分析の対象となったグループでは大部分のメンバーがグループワークに関与しており，与えられた設問に解答することに指向してふるまってはいるが，主として英語の単語力および読解方略が不十分であるためにグループとして得心のいく解答がすぐには導けず，しばしばグループワークが停滞する．

このようなときにメンバーの一人が「わからない」ないしそれに類する発話をすることがある．この発話は自分の理解状態の表示であり，他者に強く働きかけて何らかの行為を求めるものではない．しかし，それまで個々に設問の答えを考えていたメンバー達がこの発話を契機としてグループで話し合いを始め，グループワークが進展している例が見られた．本章では，このように誰かが自分の「わからない」という理解状態を表示することが相互行為の中でどのようにはたらき，その結果グループワークという共同活動においてメンバーの関与の構造がどのように変わっていくのかを論じる．

以下では，まず第 2 節で本章の分析対象であるデータの概要を記し，データ内でメンバー達が参与している活動の性質を示すとともに，メンバー達の関与の構造について検討する．分析対象である「わからない」という理解状態の表示についても論じる．第 3 節では，本章の議論に関わる先行研究を概観する．その後第 4 節で「わからない」という表示により開始される相互行為の分析を行い，その記述を受けて第 5 節で，本章で論じた現象の意義についてまとめる．第 6 節では若干の補足的な議論を行う．

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 3 章

大学英語授業でのスピーキング活動における「非話し手」の振る舞いと参加の組織化

横森大輔

1. はじめに

ある話し手が発話を行っている際，その場で起きていることとして最も私達の目につくのは，発話やそれに伴う身振りなど，話し手の振る舞いであると言えるだろう．事実，数多くの言語研究やコミュニケーション研究は，話し手の産出する言語表現や非言語行動の記述を中心に行われてきている．しかし，誰かが何かを話している時，その場にいる話し手以外の人々(以下「非話し手」と呼ぶ)は，何もしていないわけではない[1)]．むしろ，これまで相互行為研究者たちが論じてきたように，非話し手もまた，様々な言語的・非言語的な振る舞いによってその場の活動を話し手と共同構築している(Goodwin, 1981; Heath, 1984)．さらに，そういった非話し手による言語的・非言語的な振る舞いとそれによる活動の構築のあり方は，その場に関わる制度や環境によって制約・影響を受ける．本章は，その一事例として，大学英語授業内で実施されたスピーキング活動の録画データを検討する．

本章における議論の骨子は次の通り．分析対象のスピーキング活動において，非話し手はしばしば，頷く・視線を合わせる・相槌を打つ等のいわゆる「聞き手行動」を欠き，なおかつその場の活動を問題なく成立・進行させている．これは，非話し手がこの活動の制度的・環境的な条件に適応して振る舞った結果として理解できる．すなわち，この活動における話し手の発話が，その場にいる非話し手に向けられたものというより，語学のパフォーマンスないしエクササイズとして行われており，その一方で非話し手は発話を受け止める聞き手ではなく，発話に対するレビューアーとして参与している，という特徴が関わっている．このことを示すのが本章の狙いである．

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 4 章

Web ビデオ会議
―関与性を指標する相互行為リソースの一考察―

池田佳子

1. はじめに

本章では，テクノロジーを介した会話を構築する多様な環境要因を掘り下げて考察しながら，対面コミュニケーションにおける複数参加者の相互行為との異なりを考えていく．具体的には，我々の現代社会においてユビキタスに利用可能な，バーチャルなコミュニケーションツールであるウェブ会議の会話場面を調査対象とする．ウェブ会議の活用が日常茶飯事となった昨今では，我々がウェブ会議に参加し会話を行う場合，「バーチャルな会話であること」は自明であり，対面での会話と全く同様のコミュニケーションを行えるとは考えにくい．しかし，2003年に Skype などのツールが普及し始め[1)]，さらに技術は発展し動画を付随しての会話が2010年に可能となった．急速な情報コミュニケーション技術(ICT)とは裏腹に，それらを活用する側である我々の多くは一歩出遅れつつも，ようやく近年になり一般人の日常の一場面となり，そこに秩序が構築されつつある．本章では，このウェブ会議ツールを用いたコミュニケーションの秩序の一端をとらえるべく，エスノメソドロジーの視点から実際の談話場面の断片を考察する．

エスノメソドロジーは，ガーフィンケルを父とし，社会の成員(人間を含むすべての成員)が日常の様々な生活場面を構成していく際に用いる方法(エスノ・メソッド)を研究する社会学の一派であるが，このアプローチの中で，「見る・観る」という行為に焦点化した研究が数多くなされてきている(Garfinkel, 1981)．例えば Lynch(1985)では，研究所での実験作業中になされる「観察行為」について，また Lynch(2006)は野鳥観察の様子を捉え，見る対象となる場面の何に視程(visibility)を見出し，どのように物事を切り

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 5 章

空間をまたいだ家族のコミュニケーション
―スカイプ・ビデオ会話を事例に―

砂川千穂

1. はじめに

昨今のIT技術の発展により，私たちのコミュニケーションの可能性は対面場面のみならず，物理的に離れた場面へと広がりを見せている．直接対面できない遠方にいる者同士でも，スマートフォンやウェブカメラを用いれば，即時に顔を見ながら会話できるようになった．本章は，日本とアメリカに離れて住む日本人家族同士がスカイプ・ビデオ会話を通じて家族の古い写真を鑑賞する場面を分析する．特に，物理的距離や視野の限度といったスカイプ・ビデオの特性が参与構造にもたらす不均衡を，参与者がどのような手続きで解消していくのかを明らかにする．また，なかなか会えない家族・親族がどのように家族としての結びつきを生み出しているのかを議論する．

2. 分析の枠組：テクノソーシャルな遠隔地間会話

スカイプ・ビデオ会話やテキストメッセージのような，インターネットを介したコミュニケーションは，「リアル」と切り離された「バーチャル」なものであると捉えられる傾向にある．特に遠隔地間会話の従来の研究では，対面場面を基軸とし，遠隔地間会話に足りない側面を明らかにし，コミュニケーション上の問題解消を試みるような研究が多く見られる．例えば，空間を超えた指差しの実践，身体位置情報といった三次元的要素は，テレビやコンピュータモニターのような二次元画面では削ぎ落とされてしまう場合が多い(大塚ほか, 2013)．また，画面や音声の途切れ，発話音声到達の遅延といった技術的問題がコミュニケーション齟齬を引き起こすことも指摘されている(Keating & Mirus, 2003; Jarvenpaa & Keating, 2011)．問題指摘を目的と

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 6 章

日本語会話における聞き手のフッティングと積極的な関与

難波彩子

1. はじめに

従来の談話研究では話し手に焦点が置かれた研究が主流であったが，近年話し手だけではなく聞き手の行為にも焦点を置いた研究が行われてきている(Goffman, 1981; Tannen, 1989; Gardner, 2001; Goodwin, 1986; Yamada, 1997; 水谷, 1993; Kita & Ide, 2007)．Tannen(1989: 100)は，聞き手の「聞く」，そして相手の発言に対する「理解を示す」行動は受動的ではなく，むしろ積極的なものであると捉えている．

特に日本語会話では聞き手の積極的な関与が円滑な会話の促進に欠かせない．Hinds(1987)は日英語におけるコミュニケーションの成否について着目し，英語では話し手の方に重い責任があるが，日本語ではコミュニケーションの責任は聴衆側にあることを指摘している．従って，英語では話し手は聞き手が誤解を与えないように言葉を尽くすことになるが，日本語では話し手が自分の考えや意図を言語化しなくても，話し手は聞き手の方がそれを察するように期待する．このような日本語会話における聞き手の積極的な関与状況を踏まえ，日本語会話は「リスナートーク」(listener talk: Yamada, 1997: 38)とも名付けられている．また，水谷(1993)は，日本語会話における聞き手の頻繁なあいづちの使用状況から，聞き手が会話に積極的に関わりながら話し手と一緒に会話を紡いでいく様を「共話」と特徴づけている．日本語会話における主な聞き手行動では，終助詞，うなずきの使用(Kita & Ide, 2007)，聞き手による問いかけ(植野，2014)，あいづち，繰り返し，反応表現，協力的な完結といった「リアクティブ・トークン」(reactive token: Clancy et al., 1996)や，「リスナーシップ」(listenership)としての笑い(Namba, 2011)など

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 7 章

対立と調和の図式

―録画インタビュー場面における多人数インタラクションの多層性―

秦　かおり

1. はじめに

本章は，相互行為談話分析として録画インタビューの参与枠組みを観察し，インタビューという名の下に集まったインタビュイー(以下 IE) やインタビュアー(以下 IR) といった参与者の間で，どのような不均衡性がどう生起し，またそれがアイデンティティ表出にどう関わるのかを解明することを目的とする．

インタビューによる語りの研究は，エスノグラフィーや人類学，心理学，言語学，社会学など，数多くの分野で論じられており，その研究目的によって様々なアプローチがなされてきた．たとえば，言語学の分野においては Labov(1984) はインタビューを量的研究に必要な素材を提供するものと考え，相互行為の産物とは見なさずに IR の存在そのものに研究価値を見出さなかった．また伝統的な言語人類学においては，研究に必要な情報を得るツールの 1 つとして認識された(Duranti, 1997)．一方，「現実世界は社会的相互作用によって構成される」という社会構築主義の考え(バーガー・ルックマン, 1977) が多くの研究分野に浸透すると，現実は相互行為の中で作られるのだと考えられるようになったことでインタビューに対するアプローチも異なる様相を見せ始める．このような相互行為論の立場を採った場合，インタビューにおいては IE の語りだけでなく，IR との相互行為も分析の対象となる．その結果見えてくるものは，相互行為上編み出された「現実」であり，かつての，情報を運ぶ者／物としての導管的 IE から得られるものとは一線を画すこととなる．そこでは，その「現実」が誰にとっても事実であるか否かではなく，IR と IE という参与者の間でどのようにその「現実」が生成さ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 8 章

発話と活動の割り込みにおける参与
―話し手の振る舞い「について」の描写が割り込む事例から―

安井永子

1. はじめに：話し手の振る舞い「について」の描写の割り込み

本章で扱うのは，3人以上による多人数会話における，以下の例で見られるような現象である．この例は，7名の友人会話からの抜粋である．

（1）

1　加茂：[> ぼく < ね　ば-
2　中居：[プールも：
3　加茂：→プール　それね　プ[ールはたしかにね
4　寺里：=>　　[あ(h)いつ
5　　=> ほんとに自分の(0.2)　((参与者全員が視線を寺里に))
6　長友：　[うん
7　寺里：=> [なんか　> 話せる話題になると <((加茂を指さしながら))
8　　=> すっごいしゃべる(h)よ(hh) [ね
9　加茂：　　[((下を向く))
10　奥田：　　[uhu [huhuhuhu

3行目の，加茂の発話の産出中，4行目で寺里はそれに重なる形で発話を始めている．加茂が「プールそれね」と3行目で述べた時点は統語的にも文がまだ産出途中であるほか，加茂がこれから何を言おうとしているのかもまだ明らかではなく，加茂のターンがまだ続くことが期待できる地点である．にもかかわらず，その直後，寺里が4行目で加茂の発話に重なる形でターンを開始している．ここで，寺里が加茂を指さしながら産出する「あいつほ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 9 章

傍参与的協同
―歯科診療を支える歯科衛生士のプラクティス記述―

坂井田瑠衣

1. 多人数インタラクションにおける「傍参与的協同」

社会的に期待された役回りの異なる者同士が顔を合わせ，さまざまな身体的やりとりを交えた相互行為が展開される事例として，医療場面がある．医療場面は昨今多くの研究で分析対象とされ，医療者と患者が，各々にとって利用可能な身体的資源を用いて，医療場面に特有のやり方で相互行為を組み立てていることが詳らかにされてきた(e.g. Heath, 1986)．

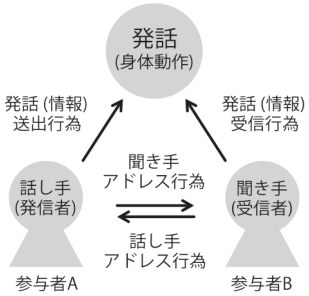

図 1　SHU(Speaker-Hearer-Utterance)図式
木村(2003, 2010)より引用，(　)内は筆者による追記事項[1)]．

医療などの対面的状況において，複数人の身体を介した共同作業が進行する過程には，互いの身体が観察可能になっているという性質，すなわち身体の観察可能性(Goffman, 1963; 高梨, 2010)が寄与している．一般的に，話し手の伝達意図を伴うコミュニケーションでは，まず，話し手 A が発話を送

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第10章

展示制作活動における参与・関与の変化から見た参与者の志向の多層性

高梨克也

1. はじめに

チームでの継続的な協同活動の分析においては，「今・ここ」の相互行為の中でのメンバの参与役割(Goffman, 1981)や関与(Goffman, 1963)[1]の変化を辿るだけでなく，こうした変化から垣間見える，より潜在的だが持続的な，協同活動に対するメンバ毎の志向性の違いにも注意を向ける必要がある．そこで，本章では，科学館での長期的な展示制作活動の中の一つのエピソードを対象として，そこでの基本活動の特徴を参与者が適切なタイミングで適切な対象物に視覚的に関与するという今・ここでの視覚的関与の連鎖的組織化という観点から分析した上で，各相互行為場面で必ずしも中心的な参与役割を担っていない参与者の振る舞いに注意を向けることによって，参与者間での参与や関与の不均衡を捉えるとともに，こうした不均衡の背後には，主に各参与者の組織上の役割分担に基づくより潜在的な志向性の違いが垣間見えることを明らかにする．組織役割やこれに応じた関心の異なるメンバからなる多職種チームによる協同活動は現在進行形のより顕在的な志向とより長期的かつ潜在的な志向とを共に含む多重の志向性によって支えられながら構成されていく．

2. 基本活動：視覚的関与における「今・ここ」の志向

2.1 活動の概要

分析対象とするのは，日本科学未来館の常設展示「アナグラのうた[2]」の制作過程において，将来展示空間になる予定の現場で行われたやりとりの一場面である[3]．この展示制作では，当該展示制作を担当する未来館スタッフ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第11章

通訳者の参与地位をめぐる手続き
―手話通訳者の事例から―

菊地浩平

1. はじめに

本章では手話通訳者を介したろう者と聴者との相互行為場面(以下，通訳場面と呼ぶ)を事例として，特に手話通訳者の参与地位(participation status: Goffman, 1981)が人々による特定の活動の中でどのように扱われているのかを，会話分析の手法に依拠しながら議論する．このことを通して通訳場面における参与の均衡・不均衡がどのようなものかを考えてみたい．

Goffmanは1981年の著書，*Forms of Talk*の中である相互行為の中で人々が演じる役割，足場(footing)の議論を展開しているが，その分析のためには参与枠組と産出フォーマットの記述が必要不可欠であるとし，参与地位という概念を導入している．Clark & Carlson(1982)の整理によると，これらの概念は「発言者」(speaker)，「発言の直接の受け手」(addressee)，「傍参与者」(side-participant)，「傍観者」(by-stander)，「盗み聞き者」(eavesdropper)，「立ち聞き者」(overhearer)という6つの分類が可能なもので，「ある活動中の1つの発話に対して人々がとりうる相互行為上の地位」だと言うことができるだろう．たとえば友人同士での雑談中になされた「明日は大学に行くの？」という発話を軸とするなら，質問をしている発言者，直接その質問を宛てられている受け手，質問を宛てられてはいないがその場で発言を聞いている傍参与者，といった具合である．当然この参与地位は相互行為を通して可変であり，その場にいる参与者たちは周囲の環境や他の参与者の行為に依存しながら特定の役割を演じ，活動を達成していくことになる．こういったGoffmanの議論は，従来「話し手－聞き手」の二項関係として捉えられてきた聞き手の概念を場面に対する関わり方の観点から拡張したものであり，

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第12章

理容室でのコミュニケーション
―理容行為を〈象(かたど)る〉会話への参与―

名塩征史

1. はじめに

螺旋を描く赤，青，白の緩やかな回転.「サインポール」と呼ばれるその目印を，誰でも一度は目にしたことがあるにちがいない.「理容室」や「床屋」と呼ばれるその店で「髪を切る」という日常的な活動は，どの理容室の，どの理容師が，どんな客を相手に行うのかによって，それぞれに固有の様相を呈する活動であると考えられる.

理容師と何気なく交わす会話も理容室での過ごし方を多様にする．江戸時代の滑稽本や落語で知られる『浮世床』にも描かれる床屋の社交場としての側面が，現在の理容室にも受け継がれているのかもしれない．もちろん，交流を望まない客もいるだろうが，そうした客との会話に対する理容師の志向／態度が，理容師を選ぶ，ひいては理容室を選ぶ条件の一つとして意識されることも少なくないだろう.

本章では，そうした理容室における理容行為と会話の観察と分析を通して，実業における参与の一側面を記述する．理容師と客の間に存在する様々な不均衡，理容室／理容行為に特有の慣習や手続き，各理容室に固有の物理的・空間的な環境といった多様な枠組みが，理容行為と会話への参与の様式にどのように反映されるのか．その複雑に絡み合った枠組み群の中で並行・両立する二つの行為を巡って，各主体(理容師・客)は参与の様式にどのような工夫を強いられるのか.

次節以降では，まず理容行為と理容室(実践と環境)との相互依存的・相互特定的な関係について確認する．その上で，その理容行為に並行する会話の様相，特にその会話が理容行為とは独立したシークェンスを保持しながら継

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第13章

ラジオ番組収録における多層的な参与フレームの交わりについて

――制度的制約に伴う現象を中心に――

片岡邦好・白井宏美

1. はじめに

本章では，「参与枠組み」(participation framework: Goffman, 1981) の不均衡が(無)意識的に操作される環境として，放送局におけるラジオ番組収録場面を取り上げ，複数の人(工)的認知により維持される参与枠組みの操作実態を分析する．番組収録という活動は，参与者の異なる専門技能，分散した認知，個別の実践が功利的に統合される制度的実践の産物である．それがどのように参与枠組みと関わり「統合の中心」(center of coordination)(当該業務中のディレクター)により運営されるかを検証することで，参与／関与フレームの特殊姓と流動性を探り，従来の参与枠組みモデルの精緻化を試みる．それを通じて参与者が命題的に保持する「宣言的知識」(declarative knowledge) のみならず，「実践のコミュニティー」(Wenger, 1998) が暗黙知として依拠する「手続き的知識」(procedural knowledge) の一端を明らかにする．

以下における「複数の認知」は，各々の専門技能を携えて相互行為に臨むディレクター，プロデューサー，音声技術者，出演者等によって言語化・身体化された相互行為の中に観察される．そこでは，ことば(音声と発話内容)，身体(ジェスチャー)，機器(録音・再生機や種々のコントロールパネル)といった異なる記号媒体と，環境的要因(F 陣形，ブース／コントロール・ルーム内の参与者と各種機器の配置など)が関与し，それらが織りなす参与枠組みは暗黙裡に形成され，流動性を持つ．しかし以下に示す通り，参与者間の人間関係を指標する呼称やモダリティ，さらに視線や身体表象などの観察を通じて，「今・ここ」において誰／何が前景／後景化されているかが浮かび上がる．

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers